

佐賀新聞 2009(平成21)年4月29日(水) 県内文化欄 文化時評

9 さが文化 2009年(平成21年)4月29日(水曜日)

県内文化

美術

野中 耕介

三、四月の県内の展覧会

では、まず、有明海のうつろいを瑞々しく染め抜いた

「傘寿記念 小川泰彦染色展」(県立美術館)が素晴

らしかった。小川にとつての創造とは自然との交歓で

あり、郷愁と親しみをたっぷりと含んだその軌跡は、

私たちに染色、そしてふるさとの美しさを伝えてくれる。

「甲斐真二絵画展」(高伝寺前村岡屋ギャラリー)

は、先月に「」で論じた若手らとは対極にある、絵具

(画材)との対話からイメージを構築する作風である。

耕し掘り起すように絵肌を作るその道程は、少

々朴訥に過ぎるような気も入選を喜ぶ作家としてはしるよつに思える。

するが、「借り物の虚仮」が跋扈する昨今の絵画群の中にあって、かえって興味をそそられる。

絵具との対話にイメージを扱るのは「瀬戸口朗子展」(画廊憩ひ)にも感じられるが、こちらは筆触がより即興的、感覚的である。瀬

戸口はそのキャリアの初期から、視覚、さらには「感情」の構成要素とは何かを探る目を持ち続けている。

技術が高まるにつれ、作品はさらに求心力を持つようになるだろう。

「第二回青木華子日本画展」(高伝寺前村岡屋ギャラリー)では、日展への

「日本画」とは何か問う

いる作品をかなり多く見るのだが、これはものと背景の間の空間への意識が希薄なためである。そしてこのことは、「日本画」とは何

だ装飾性がかりが浮き出ている点でいえば、ただた

近年の日本画の場合、絵作りの点でいえば、ただた

だ装飾性がかりが浮き出ている点でいえば、ただた

近年の日本画の場合、絵作りの点でいえば、ただた

だ装飾性がかりが浮き出ている点でいえば、ただた

「胎動する九州日本画の精鋭たち展」(福岡県立美術館)にも、同様のことがいえる。日本画の存在とあり方の問題に向き合っている作家と作品は、見ていて興奮させられる。

若手らしいスタイリッシュな作風、展観の「築二〇〇年の建築と若手作家展」(佐賀市、山口亮一旧宅)では、作家たちの創作の原点が明確に浮き彫りになっていることと心を惹かれたい。これらの原点は「素材への愛着」。このことを静かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

「日本画」とは何かに思い、真摯に見つめた好内容であったと思う。

文化時評

2009

(県立美術館学芸員)